
ふじみのおかあさん

瀬田 和佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふじみのおかあさん

【Nコード】

N4362H

【作者名】

瀬田 和佳

【あらすじ】

「じゃあ、次は有川くんだね。『かぞくについて』の作文をみんなの前で発表してみよう」

（前書き）

グロテスクな表現を含んでいます。

苦手な方はご注意ください。

『ふじみのおかあさん』

二年三くみ ありかわ ちゆき

ぼくの、おかあさんは、とてもすごいです。 なんてかっている
と、おかあさんは、ぜんぜんしないふじみのおかあさんだからで
す。

おかあさんは、ぼくがまえの小学こうに入ってすぐのときに、し
んこうむしのわるい車にひかれました。 おかあさんは、いつぱい
ちがでていたそうだったです。 ぜんぜんうごかないで、足がぐ
ちゃぐちゃになって、へんなこえばかりだすおかあさんを見て、
ぼくは、ちよっとこわかったです。 ぼくは、おかあさんといっし
よに、きゆうきゆう車にのって、びょういんにいきました。 ぼく
は、かんごしのおばちゃんといっしょにあそんでねっていわれて、
おかあさんは、どこかにはこんでいかれました。 おとうさんも、
会社をはやびけしてびょういんにいきました。 おとうさんは、ぼ
くをぎゆうつとして、ものすごくなきました。 いたいと思いまし
た。 えらいおいしゃさんのひとは、おかあさんを直してくれまし
た。 ぼくは、うれしかったです。 おとうさんが、あとでせつめ
いしてくれました。 おかあさんは、いのちがたすかるために、な
かなかしないいきもののいでんしを入られたんです。 ひとに
ためすのははじめてだからどうなるかわからないって言いました。
2しゅうかんぐらいで、おかあさんは、たいいんしました。 と
れそうだった足もちゃんとあって、よかったです。 でも、なんで
か、おとうさんは、あんまりうれしそうじゃありませんでした。

でも、ぼくはおかあさんがしんでないで、ほんとうによかったと思います。

おかあさんはまい日、いつも、おいしいごはんを作ってくれて、やさしかったです。でも、おかあさんは、ごはんをたべなくて、おくすりばかりのんでいました。ぼくは、おかあさんがおなかがすいてしんだらいやだから、ぼくのごはんをあげました。でもおかあさんは、「だいじょうぶだからね、しんぱいしないで」って、元気でした。

でもだんだん、おかあさんは、すこしへんなことをするようになりました。ぼくやおとうさんがはなしてもきいてなくて、耳がわるくなつたみたいでした。それから、ときどきくねくねしておどつたりねつころがつたりしました。あとぼくがよるにおきて、お水をもうと思つたらおかあさんがおにわで土をたべてて、すくくびつくりしました。

でも冬やすみのときに、ぼくは、おとうさんといつしよに、ここにおひっこししてきました。でもおかあさんはいつしよじゃありませんでした。ぼくは、おかあさんがいなくなるのがいやだし、がつころがかわるのもいやだから、すくくなきました。おかあさんもすくくないでいて、

「お母さんもちゆきといつしよにいつまでもいたいけど、ごめんね、もうだめなの。ちゆきはこれからおとうさんといつしよにたくさん幸せになつてね」っていうてがみをかいてくれました。字がとてもへたでした。でも、このときのおかあさんは、もうぜんぜん目が見えてなくて耳がきこえてないし、口にももうはがなくて、ぼくにおはなしできないからしょうがないって、おとうさんがいいま

した。

「いゆ、い……おえ……え……」

おかあさんは、なん回もそういつて、なきました。　おとうさんも、なきました。　ぼくもかなしくて、おかあさんにだっこしてもらったけど、おかあさんのからだはもうどこにもほねがなくてやわらかかったです。　おかあさんの手もすぐくからだにくつついてました。　まるでみみずになったみたいにニヨロニヨロしてるだけでした。

こんどのおうちは、とても大きくてすごかったです。　いつも会社に行くおとうさんが会社にいかなくて、ずうつとおうちで、ごはんやおせんたくをしています。　しせつつていうところにいるおかあさんのおかげで、おとうさんとぼくはすぐお金もちになっただけだつて言いました。　でも、ぼくは、お金もちにならなくてもいいから、おかあさんに会いたいって思いました。　ぼくは、おかあさんに会わせておとうさんにおねがいしました。　おとうさんはさいしょはだめだつて言っただけど、ぼくがいっしょうけんめいおねがいしたら、わかつたつていつてくれました。

つぎの日よう日、ぼくとおとうさんはしせつにいきました。　しろいふくのおじいちゃんについていったら、おかあさんがいるっていうへやにきました。　でもおかあさんは、いませんでした。　そしたら、しろいふくの人が、「まさか、みなげしたか」といつて、あわててまどのそとを見ました。　ぼくもいっしょにそとをみようとしたら、おとうさんがものすごくじゃましてきました。　おとうさんは、なきながら、「ごめんなちゆき、おかあさんとはね、こんどこそおわかれなんだよ」と言いました。

おかあさんのおそうしきは、見たことがない人がたくさんぼくのいえにきました。みんなはこの中のおかあさんを見て、びっくりしたり、げろをはいたりしました。もう手とかかみの毛とかぜんぜんわからなくて、かおはくちだけになって、にんげんじゃないみたいでした。ぼくも、見たときは、すぐくびっくりしました。

大すきなおかあさんは、ほんとうにしんじやったんだと思いました。でも、そのとき、おかあさんがちょっとだけぴくつとうごいたような気がしました。ぼくは、もしかしたらおかあさんにいきかえってほしいから、おかあさんのあたまをさわって、「おきて、おきて、おかあさん」って言いました。そしたら、おかあさんのあたまがずるつとれて、くびのへんからおかあさんがきれてしまいました。ぼくは、おかあさんをころしちゃったとおもいました。でもそうじゃありませんでした。おかあさんのからだの中から、なにかによろつとしたものがちよつとずつでてきました。それは、はだ色のとても大きなみみずでした。みみずになっていきかえたおかあさんは、ゆっくりはこれからできてきました。それを見たほかの人たちは、すぐくわがって、にげてしまいました。おとうさんはぼくをだっこして、「ちゆき、にげよう」といいました。でも、ぼくは、にげたくありませんでした。ぼくは、おかあさんがまだ、みみずになっただけどいきててよかったから、おかあさんといっしょにいたかったからです。ぼくは、おとうさんからおりておかあさんにぴたつとくつきました。おとうさんはそれを見て、「じゃあ、にげるのやめようか」といいました。ぼくは「うん」って言いました。

はこの中のふるいおかあさんだけ、かそうされてもえましたが、でもぼくはぜんぜんかなしくなかつたです。あたらしいおかあさんがいるからです。

あたらしいおかあさんは、みみずだから、ごはんもつくれないし

おはなしもできないけど、いつもいつしよにいてくれます。おかあさんのからだは、きれてしまってももとどおりになるので、ぼくはそれからちょっとだけおかあさんのからだをきって、小さいおかあさんをなん人もふやしました。これで、大すきなおかあさんは、どれかがしんでもぜんぜんだいじょうぶになったので、ぼくは、うれいす。小さいおかあさんといっしょに、まい日がつこうにいったりおでかけするのはとてもたのしいです。

ぼくは、そんな、ふじみのおかあさんが大すきです。

（後書き）

ふう。 ホラーを作るのはやけに難しいような気がします。

お気づきのことと存じますが、文法の不自然やひらがなの多さはほとんどが小学2年生の語り口を意識しつつ意図的にやったものです。

こうなると文章評価もへったくれもないでしょうから、かわりに感想やダメ出しなどをぜひともいただきたく、お待ちしております。

最後になりましたが、全文にお目通しくださり、本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4362h/>

ふじみのおかあさん

2010年10月9日00時14分発行